



香川県社保協2013年自治体キャラバンが終了しました！



社会保障制度の拡充を求めて県下の市町などに陳情を行う、県社保協による自治体キャラバンが11月6～8日と29日の4日間行われ、香川民医連・香川医療生協・香川民医労を始め各団体から計100名を超える人が参加しました。

29日に行われた高松市との懇談には、香川民医連・香川医療生協・香川民医労からの参加者約30名を含む40名以上が参加。新システムへの移行が進むもとの保育に対する実施責任の堅持、入院

に続く中学卒業までの通院医療費の無料化、福祉用具の貸与申請時等の窓口対応の改善、サ高住以外の施設・居宅系サービスの拡充、生活保護のしおり・申請書の窓口への設置、子どもの貧困問題への対策として高知市などで実施している無料塾の実施、他市に比べて圧倒的に多い短期保険証・資格証明書の発行数に象徴される高すぎる国保料の改善などについて要望しました。

毎年の継続したキャラバン行動の成果により、中学卒業までの医療費無料化について、12月3日に宇多津町が来年4月からの無料化を表明したことで、入院費の無料化は県下全自治体に、通院・入院とも無料の自治体は11自治体に広がってきています。

今後も国が進める社会保障制度の解体に対して、地域から社会保障を守っていく粘り強い取り組みが求められています。

全日本民医連「育ちあいの職場づくり交流集会」に参加してきました！

11/21～22にかけて開催された全日本民医連「育ちあいの職場づくり交流集会」に参加してきました。

特に2日目は、「いかに現代の青年を理解するか」という題で福岡大学人文学部の植上准教授の講演がありました。植上准教授は青年を理解するための視点について、「社会が激変している中、青年理解には階層に分けて理解しないと難しい」と講演していました。「青年とは、「子ども」ではなく「大人」になっていくための準備をしている状態であり、その理解の難しさは既存の「大人」のイメージから青年を理解してしまい、ある規範から青年層の一面をとらえてしまうところにある」と言っていました。

青年を理解するために必要なことは、①今、「大人」になることのあれこれをおさえる、②特に「大人」～「何者」かになっていくその過程の難しさなどを縁辺化して捉える、③その過程の中で、彼らが属する彼らが作り出す無力感・自己責任感の中で育ってきた「社会」の状況も捉えるという3つの視点を提示していました。また、「構造改革や新自由主義によってもたらされる社会的閉塞感・無力感や自己責任イデオロギー・固体還元主義能力感は、1990年代以降に自己形成してきた青年層にとっては非常になじみ深い。自己形成時に育ってきた環境というのは想像以上に大きな影響を与えられているものである」と大学でのエピソードを交えて強調されていました。

このような中で育ってきた青年層へ民医連の理念・理想を伝えることについて、「青年層が潜在的に抱える無力感や自己責任感と、民医連の理念・理想との距離をどれほど一緒に共有できるかが重要である」と説いていました。「日常・職場レベルの「しんどさ」は社会的要素と関連付けて捉える



必要があり、それを阻むもの（無力感や自己責任感）を解体していかねば社会レベルの視野を持つことは難しい。それをせずに社会的事実を積み重ねていくだけでは逆に新たな圧力にしかならない危険性もある」とのことでした。「青年層の多くは「語ること（言語化）」や「つながり」、「行動する場」というのが非常に少ない中で育っている。青年層を育てていくということは青年層に「語る」こと促していくことが必要で、その中で語られた言葉を自己責任論などで回収されないように拾い上げ、つなぎ合わせていく作業が支援者には求められている」という内容でした。

その他、北海道民医連の発表では患者の行動を氷山の一角ととらえその下に沈んでいる患者の歴史的背景まで思いを巡らせていくことが民医連医療には求められるという思いのもと研修で図示している取り組みや、長野民医連のJB活動がどのように全国大会を成功させたかや、JB活動を支援するためにJB・OBの会を発足し活動して現JBをサポートしているという県連もあった。などの発表もあり青年委員会としても今後のJB支援へのヒントをたくさん見つけることが出来ました。

(高松平和病院連携相談室 服部啓吾)